Ｖｉｔａｌｉｔé インタビュー

車社会のナビゲーター、小林彰太郎氏が語る

車への熱き思い

小林　彰太郎

聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

小林　彰太郎 / こばやし・しょうたろう
自動車ジャーナリスト／自動車史研究者。1929年東京生まれ。小学校から旧制高等学校まで13年間を成蹊学園で過ごす。1954年東京大学経済学部卒業。在学中から自動車専門誌に寄稿。1962年3人の同志とともにCAR GRAPHICを創刊、1966-1989年同誌編集長を務める。『小林彰太郎の世界』、『ミニ・ストーリー－小型車の革命』、『Sonographic Series on the Road』全8巻（以上二玄社刊）、『英国におけるモータリングの歴史1895-1940年』（オックスフォード大学図書館／豊田市図書館刊）など著書／訳書多数。

佐多：小林さんに初めてお会いしたのは、1996年の8月でした。英国ジャガー社が弊社のシャトー・ド・シャイイを新型スポーツカーXK8の発表会場に選んでくれた時に、ブルゴーニュでお目にかかったのがご縁となりましたね。

小林：私の友人で芦屋（兵庫県）在住の日本人が、スイス人でご高齢の未亡人から、1927年型のオーストロ・ダイムラーADMを無料で譲り受けたんですね。リストアしてそのご婦人をお乗せして走らせることが条件でした。その車が、そのご婦人の義父である佐多愛彦氏のものだとうかがっていましたので、保彦さんにお会いした時ご親戚かと思って声をおかけしたんです。

佐多：愛彦は私の祖父で、そのスイス人は私の伯母なんです。小林さんから、祖父そして伯父（直康）が二代にわたって愛した車のその後をうかがい、無性に見たくなって、1997年その車がリストアされて置いてあるイギリスの工場を訪ねました。

小林：修復を手がけたイギリス人は、仕事にかかる前にありとあらゆる資料を集めて調べ上げてから、機械部分のボーリングからボディの塗装まで、精魂込めて仕上げたのです。だからリストアされたこの車をもう一度世に出したいと思っているんですよ。その芦屋の友人はわけあってそれを手放したがっています。単なる車というだけではなく、例えばその時佐多さんがどうして、ベンツなどではなくオーストロ・ダイムラーを選んだかなどを考えると、いろいろな人生が浮かび上がってきて興味深いですね。そのイギリス人も、車が佐多家に戻れば本望でしょうけど。

佐多：いつか、このADMの‘Good Home’になれるといいのですが。ところで、小林さんは、押しも押されもせぬ日本の自動車ジャーナリズムの第一人者でいらっしゃいますが、もともと（株）ライオンの創業者一族のご出身だそうですね。実業界に進まれなかったのは、実にめずらしいことだったでしょうね。

小林：一族の長男はライオンに入るという不文律があったので、父を説得するのはたいへんでした。父は車などに関心はなく、そういう職業があるとも思っていなかった。僕自身は、3歳の時から、通る車もほとんどないのに、1時間でも2時間でも飽きずに路傍（ろぼう）に佇んで眺めているような子供でした。どうしてそんなに好きなのかわからないほど、車が好きでしたね。

佐多：現在では常識になっているロード・インプレッションズという記事のスタイル（実際のロードテストによって、テスターが車を評価する）や、ハンドリング、乗り心地、特に自動車の動的性能を評価する多くの項目は、日本では小林さんによって普遍化されたものとうかがっています。小林さんのお若い頃は、日本の自動車ジャーナリズムはどういう状態でしたか。

小林：僕が学生の頃（1950年代）は、日刊自動車新聞社の『モーター・マガジン』などを読んでいました。第一期の自動車ジャーナリストと言うか、本業は別にお持ちの方々や、メーカーのエンジニアが書いておられました。その他ではアメリカの雑誌が多かったんですが、おもしろくなかった。僕が熟読したのは、月遅れで届くイギリスの雑誌で、機械のことを書いても、表現がおもしろくて奥が深いんです。科学的でかつ文学的。ロールス・ロイスの記事などを読んでも、実際に自分が運転しているような感じがしてくるんです。筆の力だと感心しました。

　僕は大学に入ると、どうしても自分の車が欲しくなりまして。1950年前後は、所得に対して車の値段がどの時代よりも高かった頃でしょう。車を買うと友達に宣言すると、頭がおかしくなったと思われた。必死でアルバイトをして、金5万円で1932年のおんぼろのオースティン・セブンを買いました。これが走るというより動くのがやっという車だったので、乗っては直し、直しては乗りしているうちに、自動車エンジニアリングの基本知識を実地で学んだわけです。自分は全く会社に向かない人間だとわかっていたので、将来はフリーの自動車ジャーナリストになろうと決めていました。

佐多：自動車ジャーナリストとしての第一歩はどのようにして踏み出されたのですか。

小林：まず先程の『モーター・マガジン』に、「それでも車は動く－あるmarginal motoristの手記」としてオースティン・セブンの話を投稿して採用になりました。嬉しかったけど、本屋の前を通ると顔が赤くなったのを覚えています。メーカーのエンジニアが書いたものは、文章が硬く自動車工学にのっとったようなものが多かったので、僕は最初から読んで楽しい知的エンターテイメントを目指しましたね。自分が読みたいと思うような雑誌作りが基本でした。

　僕はその頃、花森安治さんの『暮しの手帖』の、広告を取らず、実際に商品を買ってテスト、評価し、ユーザーの立場からズバズバとメーカーに苦情を言うという編集方針に強い共感を覚えていて、あれのクルマ版をやりたいと思ったわけです。

佐多：その後“二玄社（にげんしゃ）”と出会われて、1962年に『CAR GRAPHIC』（CG）を創刊、その後84年に、そこからまた『NAVI』が誕生したわけですね。『NAVI』は楽しみに読ませていただいていますが、ユニークな編集長鈴木正文さんのもとで、文化論にまで素晴らしい広がりを見せていますね。

小林：『CG』はハードウェアとしての車を主体とした雑誌ですが、80年代になると車をとりまく環境も大きく変わって、技術的にはますます進歩をするけれど、それ以上に車をめぐる社会、企業、文化というソフトウェア的なものが非常に大事になってきたんですね。それで『NAVI』を始めたわけです。

　鈴木というのは変わった男でしてね。全共闘の闘士で、慶應なんですがあの安田講堂に最後までたてこもって抵抗して逮捕されたんです。非常に有能な編集者で、車の料理人のようなものです。ファッションの考察までやっていますし、女性読者もかなり増えました。

1997年夏、英国で行われたInternational Bugatti Rallyにご夫妻で出場。

佐多：今後の車社会は、どういう方向に向かって行くのでしょうか。
小林：僕が今危惧しているのは、車の安全基準に関する今後の方向性なんです。ご存知のように、昨年メルセデスのAクラスが、走行試験でひっくり返って、テレビでも放映されて問題になりました。あれは、スウェーデンのジャーナリストが、4人で乗った状態で、規定以上のスピードを出して、これ以上早く切れないというほど早くハンドルを切って、ブレーキも踏まず、それでもう一回反対に切って、という非常に無理な運転をした時に起こったんです。

メルセデス・ベンツは、そもそも緊急回避のテストを70年代の初めからやっていて、新型を作ると必ず規定のテストをして、パスをしないと外に出さないということを世界で最初にやった会社なんです。ぶつかった時の安全性という“消極的な”安全性ではなく、アクティブ・セイフティというコンセプトで性能と安全性を考えてきたパイオニア的メーカーです。それがひっくり返ったというので大問題になった。けれどもメルセデスはそれに対して一言も言い訳がましいことを言わず、2カ月間工場をストップして、死にもの狂いで設計変更をして、そういうテストに耐えられる車にしたわけです。それはメーカーとして立派なことです。問題は、そんな無茶な運転をする人は100人に1人もいないのに、他の99人が犠牲を強いられるということなのです。つまり、他の99人の善良なドライバーにとって、AクラスならAクラスの乗り心地が非常に悪くなってしまうということなんです。

車は安全な方がいいに決まっているが、どこまで安全ならいいのか。極端なことを言えば、車はすべて戦車になってしまう。けれども、戦車と戦車がぶつかったら中の人間はどうなるか。さらに戦車と、より弱いものがぶつかったら、その中の人はどうなるのか。もちろん安全な車を作るのはメーカーの使命ですが、今の論調でいくと、際限なく安全な車を、ということになってしまう。やはりメディアや行政なども加わって、その時々の安全基準というものをもういっぺん考え直す時期にきていると思います。

佐多：我々の医療業界でも似たような問題があります。体の中に埋め込むものなど、トラブルの発生は、確率統計的に飛行機事故に遭うリスクより低くても、販売が許されないということがあるわけです。それによって本来助かるべき多くの人が犠牲になることもある。必要なものは手に入らない、ものは高くなるという状況があるのです。現代人は、安全性とかリスクとかいう概念を、確率統計的に認識し許容する発想が必要なのではないでしょうか。

小林：同感ですね。社会の中での共存性、車の場合、自分だけが助かるのではなく、相手も助からなくちゃいけない、という発想が必要です。戦車みたいに全部を硬くするのではなく、前はソフトにしておいて小さい車を助ける、両方ともへこんで人間は絶対大丈夫というような、そういう発想がやっとここ1〜2年出てきましたね。まあ、いろいろなことを言っても結局は、いくら車を安全にしても最後は運転する人の人間性なんですね。人間の本性を改造するのは非常に難しいということです。

佐多：今日まで40年以上にわたり、車を通して日本の社会、企業を見てこられたわけですが。

小林：僕はとにかく車が好きだし、また、日本人だから、日本の車がもっとよくならなくちゃ残念なんですね。『CG』を始めた60年代は、日本車というのは箸にも棒にもかからないほどひどかった。こっぴどく批判をしたのでメーカーにとっては天敵だったと思いますよ。

今でも時々無力感に襲われるのは、日本のメーカーによっては、基本的な理念、どういう方向に向かって車を作っていくかでグラグラしたところがあることです。技術力は非常にあるのですが。外国の名だたるメーカーは、本当にしっかりしたフィロソフィー（哲学）をもっていて、時代によってそれを変えるようなことはしない。ジャガーにしてもベンツにしてもポルシェにしても、立派なメーカーはトップが非常に車好きで、よくわかっている。ところが日本のメーカーの経営陣は、銀行から来たり、たまたま入った会社が車を作っていた、別に何でもよかったというようなことが多い。もちろん日本のメーカーにも、非常におもしろい、立派な方々もおられますがね。

佐多：今後はどのように車とかかわっていかれるのでしょうか。
小林：基本的にこの仕事は、車が好きなだけではなく、ものを書くこと、雑誌を作ること、ものを創造することに熱意がないと続かないんです。僕はこの年までやってきて、とうに限界を越えていると思っているので、本来の仕事よりオフの世界が多くなっています。僕にとって最後に残るのは、やはりクラシック・カーなんです。クラシック・カーは世界共通のパスワードという気がします。国境、人種、職業、年齢の差を超えて分かち合えるものがあるんです。

1936年のアルビスという車をもっているんですが、1964年に初めてイギリスに行った時、これの部品がどうしても欲しくてその会社を訪ねたら、丁重に案内して全部見せてくれました。帰り際に、夕方からカクテルパーティをやりますから、もういっぺんいらっしゃいと言う。「何のパーティですか」と聞くと、広報部長が一瞬びっくりした顔をして、少し間をおいてから「あなたのためですよ」。ああ、なんてバカな質問をしたのかと思いながら非常に嬉しかったですね。日本からアルビスのオーナーが来たというだけで、社長まで出てきて歓待してくれたんです。

また、入手するのに20年かかった1926年のブガッティという車を、さらに20年かけて自分でリビルドしたりしましてね。クラシック・カーというとたいへんな贅沢のように思われますが、一生にそう何べんもあることではないし。毎年舞台を変えて行われる International Bugatti Rallyに出ていますが、これは世界中から古いブガッティだけが100台近く集まるラリーで、そういう仲間といっしょにガンガン走るのが非常に楽しみなんです。

佐多：小林さんは、自分の好きなことを自分の決めたやり方で、挑戦、追求してこられました。実に清々しい人生ですね。

小林：やっぱり心から車が好きというのが根底にあります。好きなことをやるのですから、我を忘れるほど夢中になれます。生涯好きなことをやっていけたらいいですね。

脳神経集中治療の切り札

- CAMINO Ventrix ICP monitoring system -

辻　理

辻　理 / つじ・おさむ
（株）日立製作所日立総合病院第二脳神経外科主任医長。1958年、三重県生まれ。1984年順天堂大学医学部卒業、1990年脳神経外科認定医、1992年～1994年バージニア医科大学脳神経外科リサーチフェロー。1994年11月より現職。

1. 頭蓋内圧と頭蓋内圧測定

限られた容積の中に、容量以上のものを納めようとすると圧力が発生します。人間の頭蓋内容積は約1,500mlですが、ほぼ同量の脳と髄液によって満たされており、ここに血液が流入することによって圧力が生じ、"頭蓋内圧"と呼ばれています。"脳圧"という言葉が使われることもありますが、厳密には異なったものであり区別しなければなりません。正常の頭蓋内圧は、血圧と同じ単位で表しますと、仰臥位（仰向けに寝た状態）では5～10mmHgとされており、呼吸や腹圧によって多少の変動はありますが、体位が変わらなければおおよそ一定に保たれています。頭蓋（冠）はいくつかの板状の頭蓋骨から構成されますが、小さな赤ん坊を除いて、頭蓋骨はお互いに固くくっついていますので、その大きさは変わりません。したがって、頭蓋内の容量が増大した場合、すなわち頭蓋内への出血が起こったり、脳が腫れ上がったりしますと頭蓋内圧は上昇します。この圧力が50～60mmHgを越えるようになりますと、脳が頭蓋骨から押し出されるようになり、この状態を"脳ヘルニア"と呼びます。いったん脳ヘルニアが発生しますと、生命維持に必要な脳幹の機能が損なわれ、致命的な転帰となります。また、脳ヘルニアには至らないまでも、高い頭蓋内圧が持続しますと、脳への血流が阻害される結果、脳に重大なダメージが発生し、意識障害など強い後遺症が残ってしまいます。したがって、私たち脳神経外科医にとって、頭蓋内圧を適正にコントロールすることは、治療を行ってゆく上での大きな目標となっているわけです。

頭蓋内圧をコントロールするためには、頭蓋内圧が正確に測定されていなければなりません。世界初の持続的頭蓋内圧測定は、1928年にHodgsonによって行われました。脳の内部には、脳室と呼ばれる髄液に満たされた腔があり、この中に留置したカテーテルに圧測定装置を接続することによって、脳室圧が測定されました。その後、様々な頭蓋内圧測定方法が考案されてきましたが、この方法は現在に至るまで、頭蓋内圧測定の標準的方法として広く行われています（図1）。

本法は、カテーテルを通して髄液を排出することにより、頭蓋内圧をコントロールすることができるため、頭蓋内圧測定と同時に、極めて有効な治療手段でもあります。一方、髄液を排出している間は圧測定が不能となること、脳の腫れが強く脳室がつぶれてしまうと正確な圧が測定できなくなることなど、問題点も指摘されるようになりました。

2. CAMINO Ventrix ICP Monitoring system

1985年、CAMINO Laboratories社は、光ファイバー技術を応用した頭蓋内圧測定装置の開発に成功しました。これは直径1.3mmのカテーテル先端に、圧測定用チップを取り付けたもので、脳室内・脳実質内さらには脳の表面にも設置でき、長期間にわたって安定した連続頭蓋内圧測定ができるというものでした。

さらに、1994年Codman社から発売された頭蓋内圧センサーは、さらに細いワイヤーの先端に、微小な圧電素子を取り付けたもので、光ファイバー方式と同様に扱いやすいものとなりました。

これら2つのセンサーは非常に優れたものですが、脳室の中に留置する場合には、脳室カテーテルの内部に挿入して使用する構造になっているため、脳室カテーテルの内腔が狭くなってしまい詰まりやすくなることと、カテーテルを開放して髄液を排出している際には、圧が逃げてしまうために正確な頭蓋内圧測定ができないといった欠点を有しています。

1990年、Inner-Space社というベンチャー企業が、光ファイバー方式の新しい脳圧センサーを開発しました。基本構造はCAMINO社のセンサーと同じ形式でしたが、カテーテルがより柔軟な構造となっており、脳室カテーテルの先端にセンサーが設置されているという特徴がありました。すなわち、髄液を排出している間にも、脳室内の圧力を正確に測定できる構造になっていたわけです。設計自体は優れていたのですが、製造には高度な特殊技術が必要（先端部分は手作業で作られているとのことでした）であったため、不良品の発生率が高く、カテーテル材質の問題から髄液の漏れなどの問題が発生し、結局Inner-Space社はこのセンサーを完成させるには至りませんでした。これをCAMINO社が買収し、製品として完成させたものが、CAMINO Ventrix ICP monitoring system です。我が国においても、1997年6月より、東機貿によって供給されるようになりました。

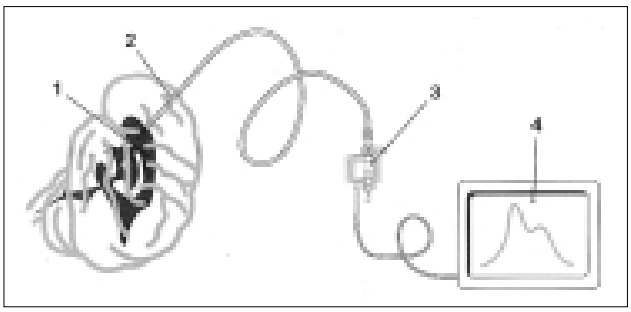


図1：脳室内に留置したドレナージカテーテルに接続された圧トランスデューサーによって頭蓋内圧を測定する。1：側脳室、2：脳室カテーテル、3：圧トランスデューサー、4：ベッドサイドモニタ

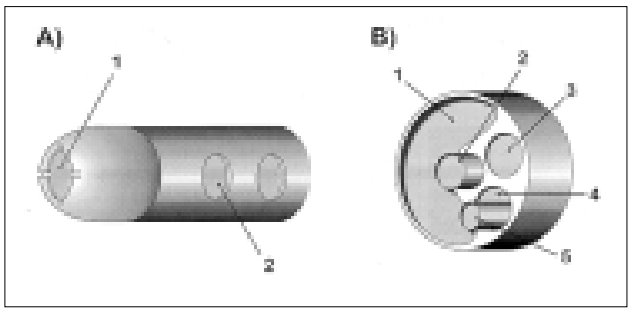


図2：CAMINO Ventrix ICP monitoring system 用脳室カテーテルの先端部分（A）とその断面図（B）。A-1：センサー部分（シリコン膜）、A-2：髄液排除用の側孔、B-1：髄液排除用ドレーン腔、B-2：剛性保持用twisted wire、B-3：スタイレット腔、B-4：大気圧代償用のベント腔、B-5：光ファイバーセンサー部分の直径は0.75mmであり、カテーテル外径は3.3mmである。

本カテーテルの断面は、図2のように4つの内腔から成っています。太い1本は髄液の排出路で、1本には光ファイバーが納められていると同時にベント孔になっており、中心には剛性を持たせるためのワイヤーが埋め込まれ、残る1本はカテーテルを刺入する際のガイド（スタイレット）を通す経路となっています。圧センサー部分はカテーテルの先端に位置しており、小さなシリコン膜が光ファイバーに接続されています。シリコン膜が圧力により変形し、反射した光に位相のずれを生じさせ、これを検知することにより圧力を測定します。カテーテル先端には、常に髄液が存在するため、脳室内髄液圧を正確に測定することが可能となっています。カテーテルを通して髄液が排出されている際にも、センサーは髄液圧を測定しているため、頭蓋内圧を正確に反映していると考えられます。

図3は、本センサーとカテーテルに接続した外部圧トランスデューサーで測定した、実際の頭蓋内圧波形です。頭蓋内圧が限界を超えて上昇したため、髄液を排除することによって頭蓋内圧を降下させていますが、その間にも、本センサーは頭蓋内圧の変化を連続的に捉えていることを示しています。

また、センサーの正確性を外部トランスデューサーと常に比較して確認できることも利点の一つです。一般的に圧センサーは、温度や湿度の影響を強く受けやすく、また、いったん設置されると1週間以上留置されるのが普通ですから、時間的経過とともに測定誤差が生じる可能性は常にあると考えなければなりません。外部トランスデューサーの正確性を確認することは比較的容易ですので、これを基準としてセンサーの正確性を確認できることは極めて重要なことといえます。

さらに、本センサーを装着した脳室ドレナージカテーテルは、特定保険医療材料としての認定を受けています。上述しましたように、持続的頭蓋内圧測定は、重症脳損傷患者において、治療の方向性を決める上でも、また治療が適切に行われているかどうかを検証する上でも、極めて重要な手段ですが、健康保険で認められている診療報酬は1日400点（4000円）とされています。本センサー以外の頭蓋内圧測定装置は、すべて保険適応外とされていたため、数万円にものぼるコストを賄うことはできず、たとえ治療上必要であっても、経済的な点から施術できないことがありました。このことが、持続的頭蓋内圧測定を一般的に行うための阻害因子となっている点も見逃せません。

本センサーが、より多くの医療施設における持続的頭蓋内圧測定のルーチン化の一助となり、重症脳損傷患者の生命・機能的予後の改善に大きな役割を果たすことを期待しています。

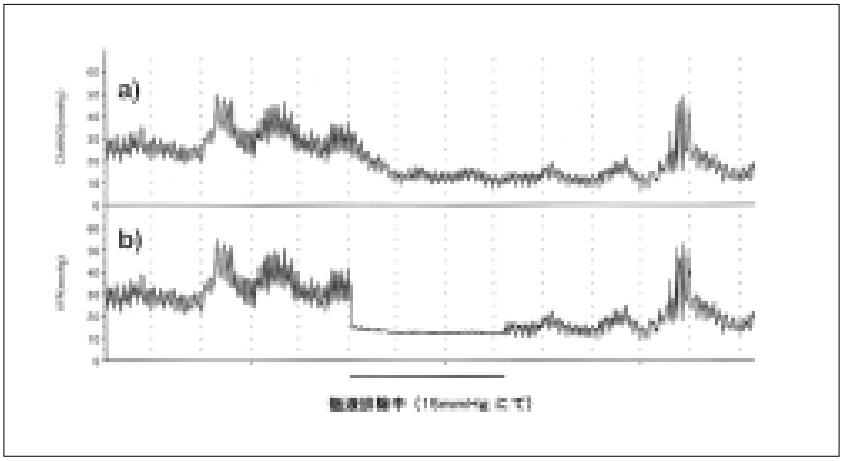
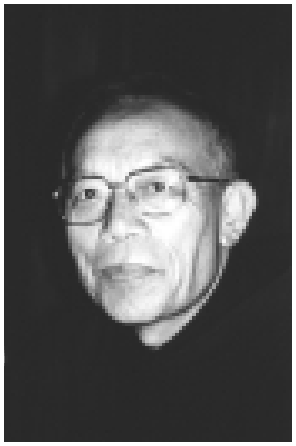


図3：上段の波形a)はCAMINO Ventrix ICP monitoring system、下段b)は脳室ドレナージチューブに接続した体外式圧トランスデューサーにて記録。頭蓋内圧が高値（＞30mmHg）となったため、髄液を排除して圧降下を図っている。その間、b)では頭蓋内圧は測定不能で、髄液開放圧のみが記録されている。それに対して、a)では頭蓋内圧降下の様子が正確に記録されている。

Pace e Bene（平和と善）

今に生きるフランシスコの魂

隠れキリシタンの末裔　田川幸雄修道士に聞く



田川幸雄修道士

長崎県の西彼杵半島に外海という町がある。遠藤周作の『沈黙』の舞台となった隠れキリシタンの里である。聖フランシスコ修道会の田川幸雄修道士は、1931年（昭和6年）、この外海町（当時は外海村）の黒崎に生まれた。外海に生まれるということは何を意味するのだろうか。

外海町

フランシスコ・ザビエルがキリスト教布教のために鹿児島に上陸したのは1549年。パードレ（神父）の第一陣が外海町に入ったのは1571年だった。キリシタン大名保護下での布教時代を経て、迫害、殉教、潜伏の時代に入り、キリシタン禁制が撤廃され弾圧が行われなくなったのは明治時代に入ってからの1873年（明治6年）だった。

キリシタン大名大村純忠の領土であった頃は村民のほとんどがキリシタンだった。キリシタン迫害が始まった頃、ここにも多くの殉教者が出た。代官から藩に出された上書が残っており、そこには山口、松口、田川、西田など武士と思われる殉教者の名前が見られる。その後、苗字をもたない農民として暮らしていた彼らの子孫が、1870年（明治3年）、平民も苗字を許されるようになったとき先祖の苗字をつけた。今信者の間に多い山口、西田、田川というような苗字は決してこの歴史と無関係ではない。

「両親も、祖父母もクリスチャンでした。家から教会までは歩いて15分、小さいときから毎朝5時に起こされて、ミサに通いました。雨のとき、雪のときは辛かった。ミサから帰って急いで朝食をとり、すぐ学校に行きます。子どもだからキリストがどうのということはわからない。お墓の横を通って、まだ暗い道をふるえながら、それでも休まず通いました。黒崎、出津のキリシタンの歴史について知ったのはだいぶ後のことです。遠藤周作ではありませんが、子どものときはそんなものです」

修道士への第一歩を踏み出したのは、14歳のときだった。本河内にある聖フランシスコ修道会の修道士が、各地を回って志願者を募集していた。

「自分から進んで行きたいというようなことはなかったと思います。周りから言われて、なにか追われるようにして行ったような気がします」

長崎市の本河内で中学、高校に通い、その後の1年間は修練期だった。学生時代から、授業のないときはかなりの労働をした。材木運び、修道院内の工事の手伝い、活字を拾ったり、冊子を折ったり。とにかくできるだけお金をかけないで、少しでも多くの『聖母の騎士』誌を出すのが修道士たちの布教活動だった。

修道会に入るための準備期間である修練期を終えると、先に進むか、そこで辞めて帰るか、自ら決定しなければならないときがくる。まだ20歳前の若者は、どんな気持ちで“有期誓願”を行うのだろう。

「自分は本当にこれから修道会に一生を捧げるのか、と思うと、追いつめられてせっぱ詰まった気持ちになりました。人間の弱さを考えて、一応3年という有期の誓願でしたが、自分の中では無期誓願と同じです。神の前では、3年などという年月はありません。一生をかけて、ということですから、そのときは相当な葛藤がありました」

田川修道士は、有期誓願を終え、東京に上る。

コルベ神父と聖母の騎士修道院

今も長崎市本河内にある、田川修道士が学んだ「聖母の騎士修道院」。日本における歴史は、ポーランド

この外海の美しい海には、その昔殉教した人が蓑に包まれて流されたという。今、夕陽ヶ丘という美しい岬には「沈黙の碑」が建ち、「人間がこんなに哀しいのに主よ海があまりに碧いのです」と刻まれている。

ここには遠藤周作記念文学館の建設も予定されている。

A

B

のコルベ神父の来日で幕を開ける。700年の伝統をもつ聖フランシスコ会の司祭だったコルベ神父は、生涯をかけて、この地球上に、けがれなき聖母にすべてを捧げる信仰者を増やすという理想を追い求めていた。新しい修道会を創るのではなく、伝統ある聖フランシスコ会の中に会をもち、自らの手で『聖母の騎士』誌を印刷・発行し、厳格な聖フランシスコの修道生活に生きた。その東洋での拠点が長崎だった。

昭和5年から11年までの6年間、長崎で布教活動に専念したコルベ神父の足跡は、小崎登明氏（本名・田川幸一）の著書『ながさきのコルベ神父』（聖母の騎士社・聖母文庫）に詳しい。小崎（田川）氏は、田川幸雄修道士のいとこである。1928年生まれなので、幸雄氏の3つ年長。北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に生まれたが、本籍を同じく外海町黒崎に置く。昭和20年8月長崎・浦上で原爆にあい、2カ月後聖母の騎士修道院に入っている。

コルベ神父と聖フランシスコ会修道士たちは、粗末なバラックに住み、黙想と労働に過ごす日々を送る。初期の頃の修道士の寝室は屋根裏だった。内側から瓦が見え、瓦の隙間から夏はヤブ蚊、冬は雪が忍び込んだ。ポーランドでは主食のじゃがいもが日本では高いので、食糧係の修道士は「日本にじゃがいもはない」と仲間に言っていた。『聖母の騎士』誌の発行にお金を回すためにコルベ神父は、栄養失調が原因の腫れ物で痛む足をひきずり、3銭のバス代を節約した。黙々と自らの手で働き、雑誌を発行する西洋行者たちの姿は長崎の人々の心をとらえた。コルベ神父が1930年、長崎に上陸した1カ月後に月刊『聖母の騎士』を1万部出した印刷所は、今でも本河内の聖母の騎士修道院で出版を続けている。『聖母の騎士』の他に聖母文庫を発行することによって、コルベ神父の遺志を人々に伝え続けている。

コルベ神父－アウシュビッツの死

日本で『聖母の騎士』の発行と学園教育に専念した後、1936年（昭和11年）コルベ神父はポーランドへ帰国した。1939年第二次世界大戦勃発。1941年2月17日、修道院にやってきたドイツ兵に連行された神父は、ワルシャワで投獄された後、5月にアウシュビッツに送られた。

その年の末、コルベ神父が収容されていた獄舎に逃亡者が出た。逃亡者を1人出すと、同じ獄舎に収容されている者10名が処刑される。2人めを出すと20名。処刑法は、収容されている者たちが、これでだけは死にたくないと願っていた餓死牢送りである。妻と子がいると泣いて訴えた一人に代わって、自分が行きたいと進み出た神父に、人を殺し慣れていた収容所長も声を失った。

コルベ神父は餓死牢にくだった10人の中で、最後まで生き残った。身代わりになった日が7月29日、死の注射を受けたのが8月14日。聖母マリアへの信仰で、飲まず食わずで病弱な身体を17日間もちこたえさせた。他の無惨な餓死の死体と違い、神父の死体は清潔で輝いているように見えた、と後に死体運搬係の獄吏が語っている。

聖書に「友のために生命を捨てるより大きな愛はない」という言葉がある。この福音的愛を実践したコルベ神父は、「愛の殉教者」として世界の人々の尊敬を集め、1982年10月10日バチカンにおいて、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世によって、カトリック聖人にあげられた。

コルベ神父の聖母の騎士会で修練期を終えた田川修道士は、有期誓願をして東京に出てきた。北区の西ヶ原の神学校で受けた授

アシジの聖フランシスコ

業はすべてラテン語だった。日本語でも難しい哲学の授業をラテン語で受け、試験に通らず脱落していく者も少なくなかった。試験に受かり哲学を修めた後、病気をして病院回りをしたが、やがて長崎の小長井にある聖フランシスコ修道会の養護施設に落ち着く。人生の大きな部分を過ごすことになるこの施設では、身体をはって子どもたちと生きた。

「子どもたちはよく逃げ出します。上手に逃げるのを追いかけ回して、けっこうおもしろかったですね。だんだん、勘で、今どのへんを逃げているのかわかるようになります。夜中まで走り回っていました。夜中の3時に警察から電話があれば、すぐに連れ戻しに行きます」

1991年3月から1997年3月まで、6年間をフランシスコの聖地アシジで過ごす。どのようなきっかけでアシジに向かうことになったのか。

「もう学校も停年近くになり、学校でも古株になってくると、会議などで子どもたちと離れていることが多くなりました。もうこの先長くはないだろう、と思ったときに、最後にあたって、もう少し自分を探るというか、人生をもっと静かに見つめ直したいと思うようになったのです。ちょうどそこに、アシジに行かないかという話が入ってきました。欧州、特にイタリアには行ってみたいと思っていましたから、言葉の問題はありましたが、ラテン語を脱格にすればなんとかなると思って出かけました」

「アシジでは、聖フランシスコ教会大聖堂で、訪れる日本人を教会内に案内して説明を行いました。各国の修道士がいましたが、

c

日本人訪問者の数は多く、15〜20名くらいの団体が1日4組はいました。多いときでは1日500人ということもあった。3年後に日本人修道士が1人応援に来るまでは1人でしたから、過労で病院に担ぎ込まれたこともあります。ところが、身体はどんなに疲れていても、不思議と疲れたとは思わないんですね。夜はぐたーっとなりますが、朝になると元気になって、不思議にファイトが湧いてくるんです。朝のミサで祈ると、不思議なエネルギーが湧いてくるんですね。疲れ過ぎていたときも、眠りながら説明だけはちゃんとしていたと言われました。1人でも多くの日本人訪問者に、フランシスコのことを知ってもらいたいと思うばかりでした」

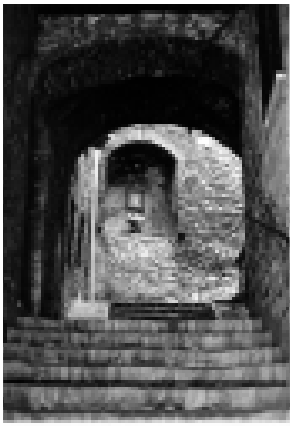
アシジの聖フランシスコ

聖フランシスコは、1182年（一説に1181年）イタリアのアシジに生まれた。アシジは、ローマの北方に広がるウンブリア地方の丘の上に位置し、旧市街の人口が5000足らずの美しい街である。フランシスコは20歳を過ぎた頃すべてを捨てて新しい生活に入り、1210年、福音を告げる共同体を創るために11人の弟子と共に修道会「小さき兄弟会」を創立した。1226年10月3日、44歳で亡くなったフランシスコは、その2年後には聖人の列に加えられる。毎年10月4日は聖フランシスコの祝日とされている。

カトリックの聖人の中で最も今日的と言われ、また、日本ばかりでなく世界で最も人気のある聖人と言われる聖フランシスコ。ウンブリア平原に咲く小さい花のように、また大空にさえずる雲雀のように自由を生きたフランシスコにちなんで、米国は1846年、カリフォルニア州の一都市をサン・フランシスコ（San Francisco）と改名した。洗礼を受けるときには自分の好きな聖人を洗礼名に頂くが、アシジの聖フランシスコを選ぶ人は非常に多いという。

「アシジで暮らしていると、アシジには今でもフランシスコが生きているという感じがするんですね。そこに暮らしている人たち

D



E

の善良さと、フランシスコを非常に大事にしている心が伝わってきます。フランシスコの生涯を見ると、彼は神が創った自然、つまり太陽、月、星、水などを通して神を賛美しています。イタリアの国の守護聖人でもあり、1979年には環境保護運動の守護の聖人にもなりました。狼に話かけると狼がおとなしくなったという『グッビオの狼』の話、ジョットの描いた『小鳥に説教する聖フランシスコ』は有名ですが、街を散歩していると、フランシスコが本当に鳥に話かけていただろうという感じがしてきます。フランシスコは道を歩きながら、もうニコニコして、ほとんど踊っていたのではないかと言われていますね。それくらい喜びが心からあふれ出ていたそうです」

「また、フランシスコは、解釈しないで、聖書を文字どおり実行した人。私があなた（神）にお願いしたいことは2つあります。1つは、受肉と十字架の苦しみを私にもお与えください。もう1つは、人々を愛するすばらしい心を私にもお与えください。そして2つともかなえられたと言われています」

「聖パウロは、“私は戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです＊”と言って壮絶な最後を遂げましたが、私などはすぐ横道にそれ、崖っぷちから落ちそうになります。弱いからいいんじゃないですか。すべての人を兄弟としたフランシスコは、弱いままの私たちを受け入れてくれます。私などは今、フランシスコのフの字も生きていないような気がしますが、自分なりにでいい、フランシスコの生き方を、自分の残された人生で少しでも活かしていきたい。また日本の皆さんに少しでもお伝えしたいと思っています。出されたものは何でも喜んで食べる、ないものは要求しない、というようなことから、人を裁くな、すべてを受け入れろということまで。みんながそういう気持ちになれば戦争など起こるはずがない。フランシスコは平和の使者でもあります」

「古今東西フランシスコに魅せられた人は多いが、どう生きるかはその人にまかされています。いっぺんに望むのではなく、小さなことから少しずつ。こんな世の中ですが、焦らなくてもいい。それに、教会は不思議なんですね。その時代にあった聖人を送り出すんです。教会が堕落したときにはフランシスコが現れた。そしてコルベ神父、マリア・テレサ――その時代が必要とする人を送ってくれます」

聖フランシスコの生涯を描いたFranco Zeffirelli監督の映画『ブラザー・サン　シスター・ムーン』（1972、伊）では、贅沢と倦怠の中で精気を失った裕福な人々とは対照的に、清貧の中で、人のために楽しげに働くフランシスカンたちがこう歌う。

“夢をまことにと思うならば、あせらずに築きなさい
その静かな歩みが　遠い道を行く、心を込めればすべては清い
この世に自由を求めるならば、あせらずに進みなさい
小さい事にもすべてを尽くし、飾りない喜びに気高さが住む
日ごとに石を積み続け、あせらずに築きなさい
日ごとにそれであなたも育つ、やがて天国の光があなたを包む”

「帰国後は教会と教会付属の幼稚園で、小さい子どもたちといっしょに過ごしています。毎朝６時半からミサがあります。どんなときでも、必ず毎朝祈りの時間があります。精神的に迷っている人、飢えている人は多い。この小さな礼拝堂にも、入りきれないほどの人が来ます。神父、94歳のポーランド修道士と3人で忙しい毎日を過ごしています」

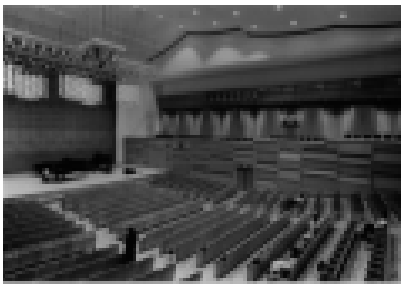
＊参照　テモテへの手紙 二 4,7-8a

写真 A, B by Y. Sata
写真 C, D, E by S. Iiyama

参考図書：『アシジの聖フランチェスコ』ジュリアン・グリーン著、原田武訳、人文書院
『アウシュビッツの聖者コルベ神父』マリア・ヴィノフスカ著、岳野慶作訳、聖母の騎士社
写真集『アシジの丘』撮影：北原教隆、地湧社

ジャズメンと子どもたち

市民運動が生みだした Jazz Month In 旭川



大雪クリスタルホール音楽堂

北海道旭川市。北海道のほぼ中央、上川盆地に位置し、札幌につぐ道内第二の都市である。旭川市には、市民の力が結集して作られたいくつかの建造物が点在する。外国樹種見本林の入り口に建つ、1998年6月オープンの三浦綾子記念文学館。また、そこから程近いところには、市民の力が大きな原動力となって作られた、北海道初の音楽専用ホールをもつ複合施設「大雪クリスタルホール」がある。

1998年10月、ここ旭川で「ジャズ・マンス・イン・旭川」というイベントが行われた。これは、大雪クリスタルホールを中心に、世界的ビブラホン奏者ゲーリー・バートンを初めとする国内外の一流ジャズ・プレーヤーを集め、1995年以来毎年行われている音楽活動である。市民に広く音楽を楽しんでもらうためのジャズ・コンサートに加え、子どもたちに音楽の楽しさを知ってもらうことを目的とした、学校訪問、障害児音楽教室、ジュニア・ジャズ・オーケストラなど、ジャズメンと子どもたちの交流が様々な形で行われている。有名ミュージシャンを集めたこれらの催し物が、なぜここ旭川で実現したのか。ジャズ・マンスにかかわる何人かの方にお話をうかがった。

■大雪クリスタルホール

旭川市民の間に、旭川市に本格的音楽ホールを、という市民運動が高まっていたのと時を同じくして、旭川市も文化事業の一環として市民生活における文化の拠点を、と考えていた。当初の第3セクターでという計画は挫折したが、市が建設を請け負うことになり、1993年総面積26,000m²の敷地に、博物館、国際会議場、音楽堂を合わせもつ複合施設が完成した。だが、専用ホールの運営としては行政的な人員配置になり、ノウハウをもった人も少なかったため、市民への広がりに限界があった。そこで、市民運動をしてきた「ぬくもりホールの会」*が中心となって、ソフト的な部分で協力できるのではないかということから、市と市民の協力が始まった。

■ジャズ・マンスの実現

この音楽ホールの本来の目的は、音楽文化を育てること、音楽を通して市民の交流をはかること、特に21世紀に向かって子どもたちの感性を育てていくこと、そこで本当の人間らしさを学んでいってもらうことだった。ジャズ・マンスの実行委員長、村田和子さんは市民運動の最初からこのプロジェクトにかかわっている。

「クラシックは必然的に市の方でも取り組むわけですから、じゃあ私たちはジャズでいきましょう、こういうホールでもジャズはできるんですよ、ということを示したかったんです。ジャズといえばアメリカ。教育にもかかわることができ、みんなが驚くようなビッグネームということで、ゲーリー・バートンの名前が挙がりました」

ゲーリー・バートンと言えば世界的なビブラホン奏者。しかもボストンのバークリー音楽院で教育者として何十年ものキャリアがある。しかし名前を挙げるくらい誰でもできる。村田さんがすごいのは、単身アメリカに乗り込んで、突然電話をかけたことだった。日本から来ています、会ってもらいたい。ゲーリー・バートンの答えは、20分だけ時間がある、というものだった。1994年秋のことである。

「こういういいホールがある、ここから音楽を発信していきたい、ミュージシャンの長期滞在型にして、子どもたちの教育もしていきたい、と説明しました。おもしろそう、と賛同してくれて、再来年くらいからならできるかもしれない、という返事をもらいました」

帰国してから11月に、たまたま日本の南の方でチック・コリアがコンサートツアーをすると知った村田さんは、「チック・コリアには、ゲーリー・バートンと組んで一世を風靡したアルバム“クリスタル・サイレンス”がある。これの再現ができないだろうか、“クリスタルホール”で・・・」と考えた。マネージャーに連絡をとったら、たまたま1日キャンセルが出たと言う。ゲイリーに連絡を取ると、3日間だけなら行けるという返事だった。こうして北海道各地から集まった長年のジャズファンが、涙を流して喜ぶようなすばらしいコンサートが実現した。市はこれにショックを受けた。これでは市として何かやらないわけにはいかない。それでその次の年から自主文化事業の一環としてジャズのイベントに協力しましょう、と言ってくれた。

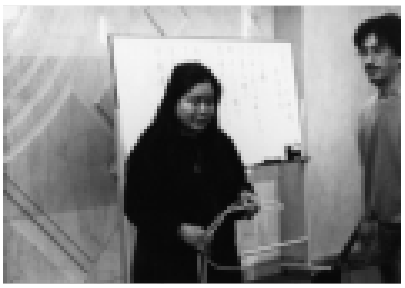
■ジュニア・ジャズ・オーケストラ

1998年初めて行われたのが、市内の小学4年生から中学3年までの生徒たちによる、ジュニア・ジャズ・オーケストラのコンサートだった。このオーケストラが結成されたのは同年6月。「21世紀に向けて、ジャズ・マンスの音楽活動を市民の間に定着させたい」という、音楽家であり実行委員でもある佐々木義生さんの考えが基にある。20〜30名の編成を予定していたが、市内で募集をかけると65名の応募があった。すべての生徒の熱意に応えたいとオーディションは行わず、65名のジャズ・オーケストラができあがり、毎月2回の練習を重ねてきた。

そもそもジャズになじみのなかった子どもたちが初めて本物のジャズに接したのが、ジャズ・マンス初年度から行われている、ジャズ・ミュージシャンたちの学校訪問だった。その積み重ねが、今回のジュニア・ジャズ・オーケストラの結成につながった。

「学校の吹奏楽しかやったことのなかった子どもたちも、1時間もするとちゃんとジャズのリズムがわかってくる。その変化は、本当にすばらしいですよ。子どもたちに、ジャズを通して大きく世界に目を向けていってもらえればと思います」と、第1回めからプログラムに参加している米国のトランペット奏者、タイガー大越さんも言う。

結成記念演奏会は、ジャズ・マンス・イン・旭川の最終日、佐々木さんの指揮のもとクリスタルホールで行われた。これに先立ち、タイガー大越さん（トランペット）他、日本を代表するジャズ・プレーヤーである土岐英史さん（アルトサックス）、向井滋春さん（トロンボーン）、深井克則さん（ピアノ）、坂井紅介さん（ベース）、海



実行委員長村田さんと総合プロデューサー佐々木さん

障害児音楽教室

老沢一博さん（ドラム）が10日間旭川に滞在し、子どもたちに仕上げの指導を行った。彼らとともに舞台に立った63名の子どもたちは、『セントルイスブルース』などスタンダードナンバーや、深井さん作曲のカリプソ『ジュニア・ジャズ・オーケストラのテーマ』など7曲を披露した。

彼らの演奏は、そのすばらしい出来で、満員の聴衆や取材陣をびっくりさせた。この子どもたちの中から、将来世界にはばたくジャズ・プレーヤーが生まれてくるのかもしれない。

■障害児音楽教室

ジャズ・マンス2年めから行われている情緒障害児（自閉症児）音楽教室。1998年は自閉症だけではなくダウン症など異なった障害をもつ子どもたちも多く参加した。中心となってこの音楽教室を進行するのは、米国ボストンの名門バークリー音楽院の教授でもあるタイガー大越さんだ。1995年帰省中に芦屋で阪神大震災に遭遇して以来、「音楽家として何かボランティア活動を」と考えていたタイガー大越さんが参加することによって、このプログラムが実現した。

「取材の人も、テレビのカメラマンも、この教室の中にいる人はみんな参加してください。みんなが歌っているときはいっしょに歌って、手拍子のときはいっしょに手拍子をして、マイクを向けられたら、恥ずかしがらないで歌ってください。子どもたちに、みんなが応援しているんだよ、ということを伝えたいんです」と大越さんが言う。

プログラムは、自己紹介、メンバー紹介、手でしゃべろう！！、タイガーと遊ぼう、ジャズ演奏と続く。音楽教室を1回やるために、朝から何度も何度も頭の中でリハーサルを繰り返すという。「子どもたちの感受性、集中度などを考えると、僕たちの演奏の責任が大きい。すばらしいものは誰にでもわかる。バラバラっとやってしまうとだめですね」

音楽の力はストレートに子どもたちに伝わっていく。最初マイクを向けられても、マイクをなめたりかじったりしているだけだった子どもが、２回めになると息をふきかけたり声を発するようになる。前半は必死で耳をふさいでいた子が、後半は耳から手を離す。何かを言おうとしてマイクを握りしめる子には、みんなで手拍子をして何分でも待つ。

大越さん自身の楽しみは？

「結果を期待してやっているわけじゃないんです。毎年毎年子どもたちが飽きずにきてくれることで、僕たちのやっていることが何か意味があることなんだと思います。僕は、一人一人の特徴をつかみたいんですね。1時間しかないですけど、やっていて、この子が何回やったら動き出した、あの子は同じことを4回やったら踊り出したと、一人一人の特徴が出てきたときがうれしいですね」

大越さんは、ボストンでも自閉症児のための特殊訓練校「ボストン東スクール」で、子どもたちといっしょにジャズをやっている。この学校は東京都武蔵野市にある「武蔵野東学園」の提携校である。1964年北原勝平、キヨ夫妻によって設立された武蔵野東幼稚園は、創立当時より自閉症教育と深くかかわってきた。子どもの成長とともに、小学校、中学校、技術高等専修学校と発展し、国内ばかりでなくアメリカなどでも注目を集めた。ボストン東スクールは、マサチューセッツ州の要望と支援で、ハーバード大学などとの教育提携により1987年に開校し、その教育効果は世界の国々から高く評価されている。

ボストン東スクールを訪れたのは、やはり震災がきっかけだったという。

「家の周りには全壊した家も多く、ご近所で亡くなられた方がいて、自分がその奥さんにご主人が亡くなっていることを知らせなければなりませんでした。その死に顔を見ていたら、僕に何か言いたいことがあったんじゃないかという気がしてきたんです。ボストンで4月くらいまで元気が出ないまま暮らしていたときに、家のポストにボストン東スクールのコンサートのちらしが入っていたので、行ってみようと思い立ちました。それがきっかけで、今は彼らといっしょにビッグバンドをやっています」

今回の新たな試みは、ジュニア・ジャズ・オーケストラで練習している生徒たちを、音楽教室の子どもたちに紹介するというものだった。普段の生活で障害児に接する機会の少ないジュニア・オーケストラのメンバーは、子どもたちの前で一生懸命演奏した。自分たちの演奏で、子どもたちが本当に楽しそうに踊ったり身体を動かすのを見て、音楽のもつパワーを改めて実感したにちがいない。

障害児をもつお父さんの一人は言った。「子どもが外に出る機会があまりない。できるだけたくさんの子どものいるところに行って、できるだけたくさんのことを体験させてあげたいと思います」

「大切なのは、継続的にこういうことができる環境をつくっていくことです。指導のできる人、ご両親の積極的参加も必要です。子どもたちもよくがんばってきたし、お母さんたちも勇気がありますよね。やらないとあっというまに年月がたつ。10年たってあの子たちが大きくなったときには、また同じように次の世代の子どもたちがいる。次々と生まれてくる子どもたちのために、社会の受け入れ体制を今作っておかなくてはならないんだと思います」とタイガー大越さん。ここでは96年の第1回音楽教室がきっかけで生まれた障害児親子の会「スモールワールド」が、2カ月に1回音楽教室を開催してきた。年間を通じて行われるこの教室が、子どもたちを大きく進歩させている。

ジャズ・マンス・イン・旭川の総合プロデュースを担当する佐々木義生さん。「3年かかってここまできました。障害児と言われている子どもたちも、僕から見るとそうは思えません。反応が正直で、ピュアです。何が障害で何がそうでないかわからない。障害がある、ないにかかわらず、あるのは音楽だけ。本来の姿になって、開かれたものの見方、考え方で、子どもたちを含めた周りの人すべてが考えなおさなくてはならない時期に来ていると思います」

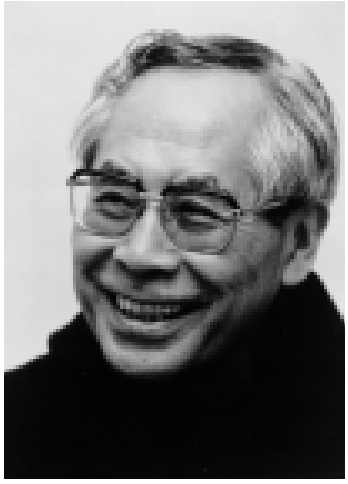
＊連絡先：村田和子（代表）：
〒070-0035 旭川市5条12丁目シュロス大城604
TEL & FAX : 0166-22-3567

タイガー大越さんと、ジュニア・ジャズ・オーケストラのメンバーたち

出会い（8）

カルメルへの道

奥村　一郎



奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

1. 偶然から偶然へと・・・

戦時中の学徒出陣、それから、終戦後まもなくの復学までは、敗戦の悲惨から立ちあがろうとしていた日本社会と痛ましい運命を共にするしかなかったが、東大復学を契機として、突然、全く予期しなかった偶然の出来事から、また次の偶然の出会いへとふりまわされる日々が続いた。

カトリックの受洗は、前記のように、1948年12月12日であったが、その翌々日、14日（火曜）は、宗教学科でのレポートを発表することになっていた。初めに考えていた論文の主旨は、例の粗暴な反キリスト論と、カトリック神学批判のつもりでいたが、全く思わぬ道の紆余曲折、果てには受洗にまで至ったため、その論文を公表することができなくなってしまった。かといって、それと全く逆の論文を用意する時間も心の余裕もない。ハタと困ってしまった。そこで、岸本主任教授の了承を得て、以前のままの論文を公表することにした。発表の折には、まず、次のような弁解を添えるしかなかった。「これから発表させていただく論文は、現在のわたしの考えではなく、今になっては、嘔吐のように吐き捨てたいものです。そのつもりでお聞きいただけましたら幸いです」と前置きしながら、約一時間にわたる研究発表を終えた。

「奥村君、君のようなカトリックがいるとは驚いたネ。これから大丈夫かな？」と、心配げに、いつもの温顔をみせながら、ひとこと言われた、今はなき、岸本先生が懐かしく思いだされる。

2. 十字架の聖ヨハネ ー『Dark Night（暗夜）』

さて、ひとつの峠を越えたと思っていたら、またすぐに、学期末のもうひとつの課題が迫っていた。「東西神秘主義」というテーマでの岸本先生の講義に関連する小論文の提出ということだった。

それまでは、主に、禅思想を中心とした東洋神秘主義にのみ関心をもってきたので、カトリックの受洗直後ということもあり、西欧のキリスト教神秘主義をとりあげたいと思った。ところが、まだ、その方面での知識が乏しく、その上、提出期限が迫ってきたため、途方にくれていた。そうこうするうちに、思わぬところで助け舟に出会った。

ある日、東大赤門から出て帰宅の折、中央線御茶ノ水駅近くの交差点で、友人Sにバッタリ会った。彼は哲学科の学生だったが、カトリックの幼児洗礼を受けており、教会のことに詳しかった。早速、例の論文テーマに困惑していることを話すと、「十字架の聖ヨハネ」という十六世紀スペインの神秘家を奨めてくれた。しかし、わたしには全く初耳、その著書や参考資料もない。そこで、「カルメル会という修道会の聖人だから、上石神井にある女子カルメル会修道院にいけばいいよ。すぐに、本など貸してくれるよ・・・」という彼の話に乗り、早速、その足で女子カルメル会修道院を訪ねた。現在は、イエズス会の黙想の家として使用されているが、外塀や大門などは、今もその頃の趣を残している懐かしい処。シスターは、すぐに聖ヨハネのいくつかの著書をもってこられた。いずれも英訳か仏訳。邦訳はなかった。藁をもつかむ思いで、とにかく一冊厚めの本を借りてきた。聖ヨハネの代表作のひとつ、『カルメル山登攀』だった。本の冒頭には「Dark　Night（暗夜）」という、八節からなる詩が載せられていた。それに続く章は、その詩にもとづく解説の形で神秘的な霊性体験が綿密にしるされたかなり部厚い本であった。英文では、日本語のように早く読めず、消化もむつかしい。それに、提出期限も間近。ここでもまた行き詰まった。以前の東大法学部の卒業試験の折のような頓知もすぐには出てこない。ここで思いついたのが、次の方法。

著者、聖ヨハネにならい、その「暗夜」という詩について全く我流の解説をすることにした。今思えば、汗顔の至りだが、背に腹はかえられない。とにかく、レポートはさいわい合格。神に感謝。

ところで、借りた本は、また、女子カルメル会修道院に返しに行かねばならない。それがまた縁となって、やがてわたしの未来を方向づけるカルメルへの兆しが見えはじめてきていた。

というのも、十字架の聖ヨハネの神秘的霊性は、長い間親しんできた禅の霊性、とくに、道元禅師の教えと余りにも近いと知ったことが、カルメル会への関心を急速に深めることになった。とくに、聖ヨハネの小品集、「霊的勧告集」は、その頃から座右の書となった。

3.幼いイエスの聖テレジア　ー『小さき花（自叙伝）』

今では、中部地区の代表的カトリック大学となっている名古屋の南山大学の体育館をかりて、神言会司祭、故ゲマインダ師の指導による青年黙想があり、それに参加したのは、受洗後まだ一年にならぬ、昭和24年（1949）の夏8月10日頃のことであった。四日ほどの短い期間であったが、なにしろ受洗後はじめての青年黙想会。退屈だったことだけを記憶している。ガランとした体育館の隅の方に、八つほど、藁のマトラスが無造作に並べられ、そこで、皆いっしょにゴロ寝をしていた。傍らには、数冊の黙想用の本が机の上におかれていた。

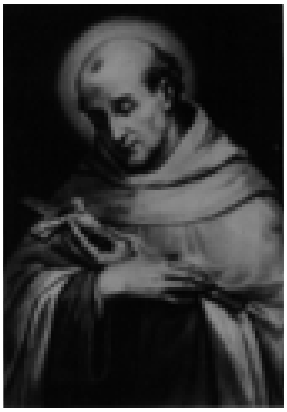
二日目ぐらいだったろうか。退屈しのぎに、なんの気なしに手にとったのが、幼いイエスの聖テレジア自叙伝、「小さき花」であった。

気楽に読み進むうちに体ごと吸いこまれるほど、その本に魅了され、一挙に読み通した。本をとじて机に返したときには、まるで、的を目指して一直線に飛びたつ矢のように、私の魂の視線は、はっきりとカルメルに向かっていた。

マッチにたとえれば、マッチの軸にあたる木の部分が十字架の聖ヨハネ、火がつくマッチの頭の部分が、小さいテレジアであった。

4. 難関

名古屋での黙想を終えてすぐ、故郷の岐阜に両親を訪ねた。二回目の大学卒業も間もない頃になっていたので、その後の方針について話し合わなくてはならなかった。結婚の話もすでにいくつかあった。受洗後、下山正義師にすすめられ、神父になる道について話したこともあったが、父は全く相手にしないどころか、激怒した。



十字架の聖ヨハネ（1542-1591）
スペインの神秘家

幼いイエスの聖テレジア（1873-1897）
フランスの聖女。昨年「教会博士」の称号をうける。

今度は、さらに受けいれられそうもない話。遠い異国のフランスに行って、カルメル会という、およそ耳にしたこともないような修道院入会ということになると、両親は、一体、どのように受けとめてくれるだろうか、全く予想できなかった。それに、わたし自身全く未知な世界であるだけに、質問されても答えようがない。

しかも、戦後まもなくの貧困のなかで、二度までも大学に学ぶことをゆるしてくれた両親、また、幼い頃姉を失ったわたしは、両親の生活のことも考えねばならない一人息子の身でもあった。

家に着くと、すぐ父が迎えに出てくれた。いっしょに廊下の椅子に腰をおろす間もなく、「お前、将来はどうするつもりか？」と、とり急ぐようにきかれた。「カルメル会という修道会に入りたい。そのためには、まだ日本に男子カルメル会がないため、フランスにまで行かなくてはならない」と、簡潔に答えるわたしの方を見て、しばらくだまったまま、目を伏せた父の姿は今も忘れられない。再び、強く拒絶されるかと思っていただけに、そのときの一瞬の沈黙は深く重かった。やがて落ち着いた様子で父は口を開き、

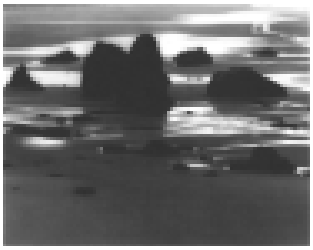
「お前がよく考えて決めたことだと思うから、おれは反対しない」と、ゆっくり答えてくれた。

急に、大きな肩の荷がおりたように互いに顔を見合わせた。すると、父はさらにひとことつけ添えた。

「だが、始めたことは必ずやり通すことだ」

この一語がどれほどの意味をもつかは、その後のカルメルにおける五十年近い修道生活での多くのことが物語ってくれた。自ら恥じいることばかりの自分をふりかえるとともに、あのときの尊い父の励ましと、十年前に他界した父のあとを追うかのように帰天した母のいつもあたたかく静かな沈黙の眼ざしを今も思う。

表紙の写真
ロバート・バイヤース作品



Face Rock, Bandon, Oregon, 1986

Robert Byers
1918年生まれ。カリフォルニア州カーメルで弁護士業を営むかたわら、1960年代からアンセル・アダムス、ウィン・バロック、ブレットウエストンと親交をもち、撮影を共にする。1969年よりフレンズ・オブ・フォトグラフィーの会計を務め、現在制作活動を続けるかたわら、ワークショップを通じて写真の普及に努めている。

写真展のご案内

フォト・ギャラリー・インターナショナルでは
下記の日程で展示を行います。

虎ノ門

1998年11月25日（水）～1999年1月29日（金）
12月26日（土）～1月6日（水）冬期休館
今道子 作品展 「Photographs 1998 」
Michiko Kon

2月2日（火）～2月26日（金）
松沢毅 作品展 「回帰 Regression」
Takeshi Matsuzawa

3月2日（火）～3月31日（水）
堀越裕美 作品展
「海のはじまり－そしてまたインドの海へ－」
Hiromi Horikoshi

P.G.I. 芝浦

1999年1月11日（月）～2月10日（水）
三好耕三 作品展 「In The Road 」出版記念展
Kozo Miyoshi

2 月16日（火）～3月17日（水）
金榮敏 作品展 「都市の詩」
Young Min KIM

3月19日（金）～4月28日（水）
吉田友彦 作品展 「砂山の砂」
Tomohiko Yoshida

松沢毅「回帰」より

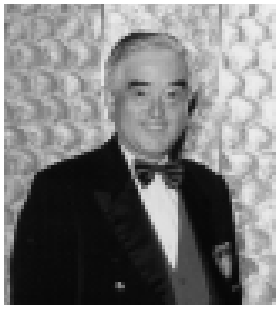
フォト・ギャラリー・インターナショナル（虎ノ門）
月－金 11:00－19:00 土・日・祝 休館
Telephone 03 3501 9123

P.G.I.芝浦
月－土 11:00－18:00 第2・4土, 日, 祝 休館
Telephone 03 3455 7827

ワイン・ボキャブラリー

ワインを楽しむための基礎用語

横山　弘和



横山　弘和 / よこやま・ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ（東京）入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン（利き酒騎士）叙任。現在佐多商会ヴィタリテ事業部在籍。

身近になったワイン・ボキャブラリー

不景気と言われる社会情勢のなかで国民の消費経済が停滞し、外車をはじめとする外国製品の輸入が落ち込んでいます。しかし例外もあります。何回めかの、いわゆるワインブームで、ワインの消費は著しく伸びています。ワイン生産の主要国であるフランス、イタリア、ドイツ、スペインなどヨーロッパは勿論、その他のニューワールドと呼ばれるアメリカ、オーストラリア、南アフリカ、さらに今話題の南米チリ産のワインに至るまで、まさに世界中の国々から日本に向けてワインが運ばれてきます。食生活が益々豊かになる、喜ばしい現象と言えます。

さて、新聞などでもワインの宣伝が多く目につくなか、最近目にとめたある輸入商社の広告は、比較的廉価なワインをケース単位で注文できるというものでした。豊富な品揃えのなかから、フランスやイタリア産のワイン1ケース＜12本入り＞が送料込みで6,000円、しかも自宅まで配送してもらえるのです。1本あたり500円で飲めることになって、これなら、家庭でも日常気軽にワインが楽しめます。

これらのワインは、それぞれ生産地とぶどう品種の特徴をそなえていて、決して安かろう、不味かろうといったことのない品質でしょう。この広告では、銘柄一つ一つに簡単な味の説明がついています。

例えば、

ブルゴーニュ　ピノ・ノワール
「ラズベリーの香りとデリケートでソフトなタンニン」
プイィ・フュイッセ
「アーモンドの香りと柔和で繊細な味わい」
レロック・ルゥサック・サンテミリオン
「濃厚な香りとコクをもつ力強い赤」

といった具合に、果物やナッツ類にたとえて、また、ソフトとかコクがあるとか、濃厚とか繊細とか、色々な形容詞で修飾し宣伝しています。この世に数多くある飲み物のなかで、ワインほどその外見（色）、香り、味わいが言葉で表現され、飲み心地までが描写される飲み物は他にありません。

このように、ワインを飲む楽しみを、色、香り、風味に分けて言葉で表現することが、ワイン通が多くなるとともに日本でも盛んになってきました。ワイン・ボキャブラリー（ワインテースティング用語）の登場です。それでは、このような習慣は、一体いつごろから始まり、どう広がっていったのでしょうか。

ワイン・ボキャブラリーの歴史

ワインを評価した古い文献に、16世紀（1537年）Charles Estienneによって出された『Vinetum』があります。しかしこの著作では、単に、ワインによって違う基本的な耐久性（持ちのよさ）、硬さ、軟らかさ、貧しさ、乏しさを特定の用語で表現したにとどまり、香りや風味については触れていません。もう少し後の1549年に書かれたOrlando de Suave（実名Jacques Gohorry）の『Devis sur le vin』では、僅かながら進歩して‘O quelle liqueur, quelle framboyse!’（なんと芳しいリキュール、なんと甘いフランボワーズの香りよ！）と感嘆の声を挙げています。これは、現在ワインの香りが色々な果物の名前で表現されている、その始まりだったのかもしれません。

その後18世紀の終わりまでこれといった変化はなく、美食評論の先駆者Crimod de La Reynièreは、彼の気に入らなかったワインについてのみ記録を残しています。それはイタリア、スペイン、ラングドックなどの甘い酒精強化酒（フォチファイドワイン）について、薬のような風味がして、どちらかと言えばワイン愛飲家のセラーよりも、薬剤師の戸棚にしまっておく方が適切だと皮肉っています。また、試飲したTokay（有名なハンガリー産の甘いワイン）のことは、「不快な腐ったリンゴの味」
がしたとけなしています。

19世紀に入ると、1826年Jullienは、『Manuel du Sommelier』の中でワインの香りを“bouquet（ブーケ）”と呼び、なぜなら、ワインは数種類の芳香で構成された混合物であるから、と説明しています。それが特色ある優れたワインを見分けるしるしになると言うのです。

同じ頃英国のワイン作家Cyrus Reddingは著書『French Wines and Vineyards 1860』の中で、「クラレット（ボルドーの赤ワイン）はスミレの香りがすべきだ」と、花の名前を少しだけ使っています。また、同世代のT.G.Shawはその著書『Wines, the Vine and the Cellar』で「非常に楽しい、より良質なフレーヴァーだが硬い、少しましだがその価値はない、好きではない・・」などの言葉でワインを評価しています。3世紀を経ても、大きな進歩は見られなかったようです。

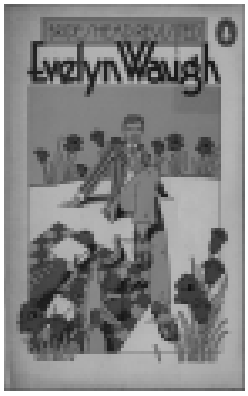
小説の中のワイン修辞学

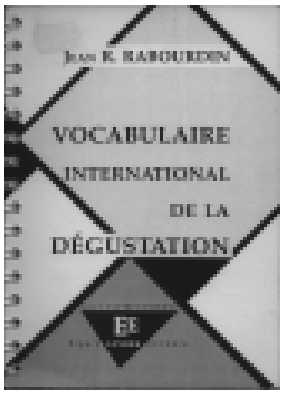
今世紀になると、ワインは欧米の著名な作家の作品にしばしば登場するようになります。その有名な例として、英国を代表する小説家イーヴリン・ウォーのベストセラー『ブライヅヘッドふたたび』があります。文中の主人公、セバスチャン・フライトとチャールス・ライダーの2人の大学生がブライヅヘッド城で古いワインテースティングの本を見つけ、城の酒蔵にある豪華なワインのストックで試飲を行います。種類の違う3本のワインを飲み比べ、酔いが回るとともに空想が異常に高まっていくのですが、そこで互いにかわす会話を紹介しましょう。

"... It is a little, shy wine, like a gazelle."
「・・・これは羚羊のように怯えた目付きをした酒だ」
"Like a leprechaun."
「アイルランドの親切な妖鬼のようだ」
"Dappled, in a tapestry meadow."
「綴れ織りの帳に織られた牧場で日光を斑ら浴びている」
"Like a flute by still water."
「静かな流れの傍で聞く笛のようだ」
"... And this is a wise old wine."
「・・・そしてこの酒は賢い老人だ」
"A prophet in a cave."
「洞窟に住んでいる予言者だよ」
"... And this is a necklace of pearls on a white neck."
「そしてこれは白い頸に掛けた真珠の頸飾り」
"Like a swan."
「白鳥のようだ」
"Like the last unicorn."
「最後に生き残った一角獣だ」

（吉田健一訳）

彼らが味わったワインは、おそらく感激に値する上等の品質であったでしょう。ただワイン名がわからないのが残念です。この会話では、





左:『Brideshead Revisited』Evelyn Waugh 1945
右:「ブライヅヘッドふたたび」吉田健一訳

花の名も果実の名も全く出てきません。ワインを語る装飾的用語も詩的感情の表現も、比喩や修辞、つまり“空想”の部類に入る言葉です。

奥深いワインの評価

それでは、“空想”ではなくワインの“事実”を語る言葉にはどんなものがあるのでしょうか。ここにたいへん参考になる専門書があります。

『プロのためのワインテースティング入門』（原題『Winetasting enjoying understanding』）Michael Broadbent著　西岡信子訳（1979年、柴田書店）

この本は、イギリスの名門競売商クリスティーズのワイン部門責任者であったマイケル・ブロードベント氏が、長年にわたってワインの利き酒を職業としてきた経験から、自己の主張をはっきり表明して書かれた名著です。ワインの利き酒記録の取り方、用語の使い方について、非常に注意深く、丁寧に説明しています。原著は英語で書かれていますが、日本語に翻訳され非常に参考になります。約220の利き酒用語が解説されていて、日常ワインを飲み、評価し、表現するのに充分です。

もう1冊、小生の蔵書に『VOCABULAIRE INTERNATIONAL DE LA DÉGUSTATION』（国際ワインテースティング基本用語辞典）があります。フランス語、英語、ドイツ語の対訳で、テースティング用語が1700以上紹介されています。それらは、基本的に視覚、嗅覚、味覚の3つに大きく分類されます。

視覚（外見）
色、白ワインの色調の濃淡、赤及びロゼワインの色調の濃淡、透明度、輝き（光沢）、流動性、粘性（酒脚）、発泡性ワインの泡立ち、色々な欠点

嗅覚（香り）
動物の香り（アロマ）、芳香性の香り（アロマ）、森林の香気（植物）、化学的な香気、色々な香気、香辛料と香料（スパイス）、発酵成分の香り、焼いた焦げ目の香気、花の香気、新鮮な果実と乾燥した果実及び木の実の香気、隠れた香気の品質、隠れた香気の強さ、香気の持続性、嗅覚の欠点、香気の進化、植物性の香気

味覚
甘さ、塩味、酸味、苦味、タンニン、ワインの釣り合い（バランス）、ワインの進化（熟成）、ワインの欠点、見かけと異なる味覚、ワインのこく（ボディ）、芳香と味覚の持続性、試飲の結論を出す前に使われる表現のリスト

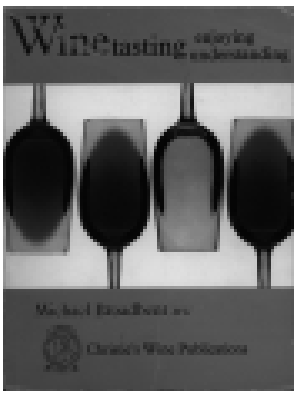
以上の項目に、それぞれ具体的な用語が羅列されていて、これこそまさにプロのための専門書といえます。アマチュアにはとてもこれだけの数の用語を駆使してワインを評価することは無理です。ワインの試飲も、仕事のため、楽しみのためと分けて考えるべきだと思います。ただ、突き詰めると、ワインの評価がこんなに奥深いものだとご認識いただければ幸いです。

肝心のブルゴーニュ・ワインについても、独特の表現があります。優れたシャブリは、ワイルドマシュルーム、あんず茸、木しめじを思わせる香りがします。また、若いブルゴーニュ・ワインの赤が、カシスの香りがするときは長持ちする証、いちごやチェリーの香りがするときは早く飲んでしまうのがよいと言われています。

最後に教訓を2つ；

ブルゴーニュワインについて、語り過ぎないこと。よいワインは自らが語りかけてくれるもの。

ブルゴーニュのワインは論ずるものにあらず、ただひたすら飲むものなり。



ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいている
ブルゴーニュへいらっしゃいませんか。
数々の銘酒を生み出すぶどう畑、
グルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、
美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、
それがブルゴーニュです。

Château de Chailly / シャトー・ドゥ・シャイイ

お問い合せ
（株）佐多商会ヴィタリテ事業部　担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087